博士学位論文審査要旨

２０１３年１２月１８日

論 文 題 目：賀川豊彦の社会福祉実践・思想が韓国に及ぼした影響に関する研究
学位申請者：李　善惠
審 査 委 員：
主　査：　社会学研究科　教授　木原　活信
副　査：　社会学研究科　教授　埋橋　孝文
副　査：　関西学院大学　人間福祉学部　教授　室田　保夫

要　　旨：

本論文は，キリスト教伝道者，社会運動家であった賀川豊彦の思想に着目し，特にその社会福祉実践・思想を抽出し，それが韓国の社会福祉形成史，キリスト教社会福祉にどのような影響を及ぼしたのかを明らかにしたものである．

これらを分析するにあたって，主に三つの観点で，議論をすすめている．一点目は，賀川の思想形成史として，なぜ彼が社会福祉事業に身を投じたのかについて，その思想と生涯を検討している．特に，社会福祉分野に限った場合の賀川についての先行研究の不十分さを指摘し，賀川の社会福祉実践・思想形成のプロセスについて分析している．二点目は，キリスト教の伝道活動から始まったその活動がスラム街の貧困を中心とする社会的ニーズに応じた様々な社会事業に広がっていくことにより生じた賀川の福祉思想の中心点を分析している．特に，賀川の実践活動を時系列に検討し，社会福祉実践における賀川の思想と活動を吟味することで，今日の日本の社会福祉実践・思想にどのような影響を及ぼしたのかを論究している．三点目は，これまでの先行研究ではほとんど研究されていない賀川と韓国とのかかわりについて探究している．そのため，賀川の訪韓経歴を実証的に辿ったうえで，韓国の社会福祉研究・教育の先駆者である金徳俊と農村運動の先駆者である劉載奇を中心に，韓国にどのような影響を及ぼしたのかについて論じている．

以上の議論によって，韓国における賀川への評価や，賀川の社会福祉実践・思想から日韓キリスト教社会福祉への示唆を以下のように提示した．肯定的な評価としては，キリスト教界において「キリスト教徒としての生き方」と「教会のあり方」を提示したこと，社会福祉界では，人格と個性を尊重しながら，互いに理解し，共に助け合い，支え合いながら「ともに生きる」思想を具現化し，コミュニティの「組織化」の視座と方法を提示したことである．一方で，「キリスト教社会主義に関する認識」をめぐる評価，および 1939 年の賀川訪韓の背後にある日本の植民地支配の「政治的な意図」の介在等について批判的に検討した．

韓国側原史料の収集，原史料の厳密な取り扱いなど若干の研究課題は残るが，賀川思想にとって「生命」「労働」「人格」の統合的意義が「社会福祉の本質」であると位置づけたこと．そして社会的状況の時代変化に敏感に反応し，「社会福祉の本質」に基づいた積極的な介入がキリスト教社会福祉の実践には不可欠であることを根拠づけ，そのためにも，賀川が主導した社会資源のネットワーク構築と，「相互扶助」と「連帯」による社会建設の思想を詳細に分析した今日的意義，そして賀川の社会福祉実践・思想が日韓キリスト教社会福祉において重要な糸口になったことを結論づけた点は高く評価できる．

よって，本論文は，博士（社会福祉学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる．

総合試験結果の要旨

２０１３年１２月１８日

論 文 題 目：賀川豊彦の社会福祉実践・思想が韓国に及ぼした影響に関する研究
学位申請者：李　善惠
審 査 委 員：
主　査：　社会学研究科　教授　木原　　活信
副　査：　社会学研究科　教授　埋橋　　孝文
副　査：　関西学院大学　人間福祉学部　教授　室田　　保夫

要　　旨：

2013 年 12 月 18 日（水曜日）午後 5 時より午後 6 時半まで公開学術講演会を臨光館 212 教室において開催した．また同日午後 6 時 40 分より午後 8 時半まで，口頭試問および語学試験（英語）を渓水館社会福祉学科資料室において実施した．

公開学術講演会では，審査委員 3 名を含む一般聴衆のまえで，提出された博士論文について論理的に説明することができた．またフロアーからの質疑応答の時間においても明快に適切かつ丁寧に各質問に応答することができた．口頭試問では，専門分野（社会福祉学，キリスト教社会福祉学）において，博士学位取得者に相応しい能力と知識を有していることが確認された．語学試験においては，博士学位取得者に相応しい能力を有していることが確認された．

以上のことから，本学位申請者の専門分野に関する学力ならびに語学力は十分なものであると認める．よって，総合試験の結果は合格であると認める．

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目：賀川豊彦の社会福祉実践・思想が韓国に及ぼした影響に関する研究
氏　　名：李　善惠

要　　旨：

本研究の目的は，賀川と韓国とのかかわりを中心に，社会福祉実践・思想において賀川が韓国にどのような影響を及ぼしたのかを明らかにすることである．そこで，三つの研究課題を立てた．一つ目の研究課題は，なぜ賀川が社会福祉に身を投じたのかについて，賀川の生涯を検討することである．これは，賀川の社会福祉実践・思想の形成過程を詳細に検討するためである．二つ目の研究課題は，伝道活動から始まった賀川の活動が，スラム街のニーズに応じた様々な事業に広がっていくことにより生じた，社会福祉分野における賀川の実践と思想を分析することである．特に，賀川がどのような活動に力を入れたのかを時系列に沿って検討しつつ，社会福祉の実践を築いてきた賀川の活動をまとめていくことで，今日の日本の社会福祉実践及び思想にどのような影響を及ぼしたのかを探るためである．三つ目の研究課題は，先行研究ではあまりみられない賀川と韓国とのかかわりについて追究することである．そのため，賀川の訪韓経歴を実証的に辿ったうえで，賀川が韓国の社会福祉実践・思想にどのような影響を及ぼしたのかについて論じる．

第Ⅰ部においては，社会福祉分野での賀川の実践と思想を分析する前に，なぜ賀川が社会福祉に身を投じることになったのか，その背景について，彼のライフイベント（人生上の出来事）を検討した．まず，発達的出来事と歴史的出来事に分け，発達的出来事として，賀川は「妾の子ども」というコンプレックスからキリスト教に出会って「神の子」になったこと，それがきっかけとなり神学部に入って一生牧師として歩んで行くことになったと言及した．歴史的出来事として，賀川は病気による短命の人生を神に捧げたいという考えから決心したスラム街での生活体験を通して，貧しい人々の悲惨な生活を目の当たりにし，彼らに手を差し延べることから賀川が社会福祉に強く関与していくことになったと述べた．つまり，賀川を巡った様々なライフイベントは，キリスト教への信仰や病気によってスラム街に入ったという動機，関東大震災の社会的状況などによって賀川の生涯が社会福祉に向けられたことを明らかにした．また賀川を巡って重要な他者との出会いについては，思想的出会いと実際的出会いに分けて分析した．マイヤースの書斎から多くの思想家に出会った賀川は，特にイエス，トルストイ，ウェスレーを通して「福音」「平和」「奉仕」というキリスト教徒としての生き方を学び，ローガンとマイヤース，鈴木，杉山との実際的出会いの中で，社会福祉実践という具体的な活動へ繋がっていたといえよう．

第Ⅱ部では，最初の貧民救済事業であった「救霊団」，関東大震災で神戸から東京に移って行ったセツルメント事業としての「本所キリスト教産業青年会」，そして救貧より防貧を考え，農村の改良のため人材を育成した「農民福音学校」での活動を社会福祉実践として取り上げて論じた．そこで明らかになったことは，時代の状況に合わせて賀川の社会福祉実践の内容が変わっていったことであった．たとえば，スラム街で出会った人々が社会環境によって疲弊していくことを痛感した賀川が，その解決方法として行ったことは貧民救済事業の「救霊団」の活動であった．しかし，関東大震災を契機に，すべての救護活動を一時的なものではなく，一つのセツルメントの建設によって，組織的，教育的に進めようとしたのが「本所キリスト教産業青年会」での活動であった．このように時代のニーズに敏感に反応し，それに対応する解決方法を提示することが大切であると教えていた．また，たとえ社会が変化していったとしても，変わらないものがあったことも明らかになった．それは，賀川の多様な実践の原動力となった社会福祉

の思想であった．賀川が書いた自叙伝小説『死線を越えて』の他，当時の中央・地方社会事業協会が発行した『救済研究』『社会事業研究』『社会事業』，そして『農村社会事業』などの文献を読み，どのような思想をもっていたのかを探った．そして，キリスト教に基づいた「生命」「労働」「人格」という思想が彼の実践の根底にあったことを明らかにした．特に日本ソーシャルワーカーの倫理綱領と比べると，すでに賀川が社会福祉の本質として「生命」「労働」「人格」の大切さを訴え，それは今日の社会福祉の価値に値するものであると分析した．つまり，倫理綱領の「人間の尊厳」と「社会正義」の根底が，今から 90 年も前に賀川が訴えている生命の大切さを含めて，その生命のある人が人格をもっていることと，経済的な意味だけではなく，人間性の回復を通して自分らしく生活できるように労働を保障することに共通点があることが明らかになった．

第Ⅲ部では，賀川と韓国とのかかわりについて，韓国における賀川の訪問の経歴や活動，韓国で出版された文献について整理・検討を行った．韓国に残された賀川の訪問記録は，張時華編（1940）の『賀川豊彦先生講演集』のみであったため，賀川の韓国への具体的な訪問日程や活動の内容について，当時の新聞記事や賀川の文章を集めた『身辺雑記』もあわせて検討することにした．その後，賀川から影響を受けた人物の中で，社会福祉教育の先駆者である金徳俊と農村運動の先駆者である劉載奇を中心に，賀川のどのような部分から影響を受けたのかを分析した．金徳俊の場合，賀川が述べているキリスト教の両面，つまり生命の本質と生命の表現の中で，本質だけではなく表現することの大切さ，つまり社会へ目を向けることの大切さに大きな影響を受けていた．そして，その社会への関心を実践する行動力が芽生えるようにするための人材養成，つまり社会福祉教育に力を入れつつ，ひいてはキリスト教徒としての社会への責任まで強調していた．一方，劉載奇の場合，農村地域を巡回したとき，そこでの問題に気づいており，後にキリスト教に基づいた農村改良のため，組合の組織やイエス村の建設に力を入れた．それは賀川がスラム街に入って貧民の問題に気づいて貧民救済事業を行ったことと同様であった．特に賀川の「愛神，愛土，愛隣」の影響を受けて，劉載奇は「愛神，愛土，愛労働」を主張した．それは労働の真の意味について，パウロの言葉，「働きたくない者は，食べてはならない（テサロニケの信徒への手紙二 3 章 10 節）」を引用し，労働なしで生きようとする人間は生の定義を知らない人間であると強調した．これは，当時の韓国における農村の現実を示したかったからであろう．劉載奇は，組合を作って農民の経済力や団結力を向上させようとし，イエス村を建設して自立できる共同体を目指していたが，残念ながら，劉載奇の農村運動は独立運動とみなされた時代の制約によって，組合の組織やイエス村の建設を定着させることができなかった．この二人の共通点は，賀川の著書に出会い，彼の社会福祉の実践や思想に大きな影響を受け，社会福祉の実践に移したことである．また，キリスト教に基づいて時代のニーズにあわせようとしたことも共通点である．相違点は，両者とも賀川から大きな影響を受けたものの，時代的状況によって実践する内容が異なり，そしてそれに基づく思想も時代に応じて変化していったことである．金徳俊は，キリスト教と社会福祉との結合について韓国の教育現場において，なぜ社会福祉を行わなければならないのか，それがキリスト教徒にとってどのような意味をもつのか，そのためには，「教育現場」でどのように教えていくべきなのかについて訴えている．劉載奇は，農民の経済力，団結力の向上を農村社会に適用しようとし，「組合組織やイエス村の建設」が農村問題の解決方法であると述べている．このように 1920 年代から農村で働いた劉載奇と 1940 年代後半から教育研究現場で働いた金徳俊では，働き始めた時代のニーズがそれぞれ異なっていたわけである．

結論としては，韓国における賀川への評価や賀川の社会福祉実践・思想から日韓キリスト教社会福祉への示唆を提示した．まず，肯定的な評価は二つに分かれ，キリスト教界は，「キリスト教徒としての生き方」と「教会のあり方」を提案したことと，社会福祉分野では，一人ひとりの人格と個性を尊重しながら，互いに理解し，共に助け合い，支え合いながら「ともに生きる」ことや「組織化」の大切さを提示したことである．しかし，当時の「キリスト教社会主義に関する

韓国のキリスト教界と賀川の認識の差異」や 1939 年に賀川が韓国を訪問した背景が日本の植民地支配のために人民の精神を統一し，抵抗しようとする心理を鈍化させようとする「日本側の政治的な意図」があったということで，賀川に関する否定的な評価もあったと考えられる．日韓キリスト教社会福祉への示唆は，賀川の思想である「生命」，「労働」，「人格」などの意味を考え，改めて社会福祉の本質(essence)を理解し，実践することと，フロンティア・スピリット(frontier spirit) である．日韓における近代的な社会福祉は，社会福祉の制度や政策が国家の責任の下で動いていなかった時期に，キリスト教徒が生命の表現として，最先端に様々な事業を実践してきた．社会変化に敏感に反応し，社会福祉の本質に基づいた積極的な姿勢がキリスト教社会福祉の実践に大切なことではないか．そのためにも，社会資源のネットワークの構築と，「相互扶助」と「連帯」による真の社会の建設が必要である．人間と人間，組織と組織とのつながりによって，より良いサービスを提供することや，支えあってともに生きる社会を作る社会への責任も問われる．それゆえ，賀川の社会福祉実践・思想が日韓キリスト教社会福祉において重要な糸口になっていくと考えられる．